戦後70年

伝えたい戦火の記憶 3

砲弾飛び交う中、治療

決死のニューギニア戦線

元陸軍軍医、三好正之さん

「戦争は絶対しちゃいけん」と何度も口にする三好正之さん。戦時中肌身離さず持っていた聴診器と、出征前に死を覚悟し家族に託した遺髪は今も大切に残している

山口湾を望む山口市阿知須地区の阿知須共立病院会長を務める三好正之さん（97）。かつて医師として往診に自転車で回り、阿知須町長を2期務め、地域住民から「大先生」と慕われる。そんな三好さんが厳しい表情で語気を強める。「戦争は絶対にあってはいけん」。

70年前、南太平洋を舞台に、連隊の8割強が死亡したとされるニューギニア戦線に軍医として赴いた。過酷な気候条件の下、聴診器と軍刀を携えた当時を昨日のことのように詳細に語り、戦争の悲惨さを訴える。

1917年、阿知須町（当時）生まれ。旧制山口中（現山口高）を経て日本医科大に入学するも、太平洋戦争の勃発に伴い42年9月、半年繰り上げで卒業した。経済的な事情もあって選んだのは軍医の道。43年に陸軍医学校を卒業し、すぐに出征の命令を受けた。

当時は長男の正規さん（72）が生まれたばかり。「二度と帰れないだろう」。急いで家族全員の記念写真を撮り、下関から船で戦地へ向かった。

赴任した赤道近くのニューギニアでは、敵の攻撃から身を守るため50キロの荷物を背負い夜間にジャングルのぬかるみを歩いた。最初の戦闘は44年5月。「負けたら敵の捕虜になってしまう」の一心で、軍刀を振りかざし、米軍駐留地に夜襲を仕掛けた。相手の砲弾が前後左右に飛び交う中、聴診器に持ち替え、負傷した隊員の治療にも当たった。自動小銃を手にした敵兵と数メートルの至近距離で対峙したこともあった。「今日きりの命だと毎日考えていた。何度も死にかけ、よう生き延びたと思う」と振り返る。

過酷な熱帯の気候に加え、飢えやマラリアなどの病気も隊員を襲った。主要都市は連合国軍に奪われ、物資輸送の手段も断たれ、食材や手当てに必要な薬などはすぐに底を尽きた。自生するサゴヤシのでんぷんなどが唯一の貴重な栄養源だった。自身もマラリアに感染し、死の淵をさまよい歩いた。「軍医として十分に勉強できなかったし、物資もなかった」。負傷者を運ぶ担架や現地人の薬をまねて作ったこともあった。

その後、主戦地が移ったことで戦闘は収まったが、三好さんは終戦まで現地にとどまった。

復員後は大学に復学し、地元の病院を再開させた。「私は生き延びた人間。世の中のために、力を貸したい」。過酷な経験が三好さんの考え方に変化をもたらしたといい、365日休むことなく地区を回り往診に時間を割いた。正規さんに院長職を託し、80年からは阿知須町長を2期務め、2001年の「山口きらら博」の会場となった干拓地の活用などをめぐり、町政の先頭に立った。

ニューギニアでの出来事を今も夢に見るという。隊員3347人のうち亡くなったのは2722人。軍医として、多くの死を目の当たりにし、戦場であるが故、葬儀ができなかったことを今も悔いる。

ことし、戦友の一人が亡くなった。三好さんは戦争の経験者が減りつつある現状を危惧する。

「戦争がいかなるものかを身にしみて感じた。戦争はその人の家族や友人がどれだけつらい思いをするか分からん。どれだけいたましいものか」（岩崎新）

（毎週火、金曜日掲載）

出征前夜、家族の記念写真に納まる当時26歳の三好正之さん（右）。妻の故・幸子さん（左）が抱えるのは生まれたばかりの長男、正規さん